



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

不屈の精神で努力しましょう

誰しも子どもの頃に偉人伝を読んだことがあると思います。人生に対して勇氣と希望を持ってほしいという願いを込めて、親は子ども達に偉人伝を与えるのだと思います。偉人伝の中ではエジソンやシュバイツァー、日本人では野口英世が有名ですが、私は「三重苦の聖女」と呼ばれたヘレン・ケラーが大変印象に残っています。

ヘレン・ケラーは視覚と聴覚に障がいを持ち、会話も不自由でした。実はヘレン・ケラーはお母さんからある偉人の話を聞いて、発奮して、頑張ったのです。それは塙保己一という日本人で、江戸時代の国学者です。この人は盲目でありながら41歳から30年以上かけて日本の古



書・古本を集めて、『群書類従』という全集を編纂しました。

これには法律・政治・文学から医学・風俗・遊芸・飲食まで、あらゆるジャンルの文献が収められており、『群書類従』なくしては日本文化の歴史を説明することが不可能だとまで言われています。

昭和12年に来日した際、ヘレン・ケラーは予てからの念願であった、東京・渋谷にある温故学会を訪れました。彼女はここに保管されている塙保己一の銅像や愛用の机に触れたかったです。そして念願になったヘレン・ケラーは次のように語りました。

「塙先生こそ私の生涯に光明を与えてくださった大偉人です。本日、先生の御像に触れることができたのは、日本における最も有意義なことだと思います。手垢のしみ



たお机と、頭を傾けておられる敬虔なお姿には心から
尊敬の念を覚えしました。先生のお名前は、流れる水のよ
うに永遠に伝わることでしよう」

最近、西亀真さんの書かれた『幸せの入り口屋いらっ
しゃいませ』という本を読みました。西亀さんは盲目の
セラピスト（療法士）です。

西亀さんは本の出版記念講演会で「私は47歳で視力を
失いましたが、その代わりに心眼で見る、聴く、考える
などによって、人の優しさや自分の可能性を体感しなが
ら、すべてに感謝できるようになりました。目が見えて
いた時よりも幸せであると断言できます。過去と他人は
変えられませんが、未来と自分を変えられます。本を
出すことで多くの人に『幸せの入り口』に立っていただ



くという私の使命を果たしたい」と思ったのです」と言われていました。

当然のことですが、失明すると誰しも落ち込みます。

この西亀さんも大変落ち込みました。しかし、落ち込んでいては駄目だ。一步を踏み出さなければいけない。

0になったんだから、0を1にしなければいけない。1になれば1は簡単に2になり、3になっていくんだ。だから、思い切って何かを始めて0を1にしなければいけない」と考えて始めたことが、47都道府県を一人で全部回ることでした。最初は職場への道を同僚について歩く訓練をしました。一人で職場に行けるようになって、次に47都道府県を一人で回ることを志して、それを達成されました。最初は愛知県名古屋市でした。

一番、印象に残っているのは岐阜県だと言われます。



岐阜^{ぎふ}県^{けん}の温泉^{おんせん}に行^いって、温泉^{おんせん}旅館^{りょかん}に「泊^とめてほしい」と言^いうと、「目^めの見^みえない人^{ひと}を一人^{ひとり}で泊^とめることはできない」と言^いわれました。仕方^{しかた}なくビジネスホテルに泊^とまると、そのホテルにはレストランがなく、「外^{そと}に食^たべに行^いくように」と言^いわれました。どこか近^{ちか}くに良^よいところがないか聞^きくと、「ホテルを出^でてこう行^いって、こう行^いくとビルがあつて、そこにおいし^うい^しい寿司^{すし}屋^やさんがありますよ」と言^いわれました。〃目^めの見^みえない人^{にんげん}間に寿司^{すし}屋^やさんはハードルが高^{たか}いな〃と思^{おも}ったそうですが、これも〇を1にするチャンスだとい^いうことで、寿司^{すし}屋^やさんに行^いってカウンターで食^たべたそうです。その結^け果^っ、〃寿司^{すし}屋^やさんで食^たべることができれば、あとはどんなところに行^いって大丈夫^{だいじょうぶ}だ〃と思^{おも}うことができたそうです。そのビジネスホテルにあつた大浴^{だいよく}場^{じょう}にも一人^{ひとり}で入^{はい}りました。これに



よってまた0が1になりました。バイキング形式の朝食にも挑戦しました。そのようにして全国47都道府県をひとりで旅されたのです。

その後、今度はニューヨークに行かれました。0が1になったので、2を3、3を4にするために行ったのです。ニューヨークは世界中から人が集まる場所です。最近、日本は外国人観光客が非常に多く、京都の観光名所に行く日本人よりも外国人の方が多いくらいです。しかし、一年間に日本全国を訪れる外国人の数よりも、一年間にニューヨーク市を訪れる外国人の数の方が多いです。それくらいニューヨークは人が多く集まる場所です。その大都会に西亀さんはチャレンジされたのです。

西亀さんは英語が苦手だったので、三つのフレーズだ



けを覚えおぼえました。一つは「宿泊先しゆくはくさきのリッツカールトンホテルに行いきたい」です。二つ目は「日本語にほんごが話はなせる人ひとはいますか？」です。三つ目は「ビールをお願ねがいします」です（お酒さけがお好すきなようです）。この三つだけで、ニューヨーク旅行りようこうを楽したのしましたそうです。

そんな西亀にしかめさんも「網膜色素変性症もうまくしきそへんせいしょう」で目めが不自由ふじゆうになった当初とうしょは悲かなしみと不安ふあんでいっぱいなで、何なにかにつかまらなければと、盲学校もうがっこうに通かよって点字てんじを習ならい始めはじめます。年としを取とってから点字てんじを覚おぼえるのはなかなか大変たいへんなようです。「自分じぶんには点字てんじは無理むりだ」と弱音よわねを吐はいた時ときに、盲学校もうがっこうの先生せんせいが「両目りやうめが見みえなくて、両手りやうても失うなった方が唇かたくちびるで点字てんじを学まなばれたそうですよ」と言いったのです。そのことを聞きいた時とき、体からだに電氣でんきが走はしったそうです。自分じぶんよりもっと過酷かこくな境遇きやうぐうの人ひとが頑張がんばった話を聞きいて魂たましが震ふるえたのです。



そして、どうしても会いたくなつてその人に会いに行
ったそうです。同じ盲学校の先輩で藤野高明さんという
人です。この人は戦後間もない頃、弟さんと一緒に遊ん
でいる時に、不発弾が爆発して弟さんは即死。藤野さん
は意識を失って、病院で気がつくと目が見えず、両手が
ありませんでした。それでも親御さんは藤野さんに教育
を受けさせようとしたのですが、教育委員会が「就学免
除」と通達してきました。要するに目が見えなくて、手
がなかったら学校の授業についていけないだろうとい
うことで、「就学免除」と言う名の「受入拒否」だったの
です。それでも藤野さんは家で日常生活に支障がないよ
うに服を着たり脱いだり、食事・洗面・トイレはもちろ
ん、七輪に火を起こすことまで全部自分でできるように
なりました。それでまた福岡盲学校に入れるように頼み



ました。しかし、盲学校は拒否しました。なぜなら、盲学校は点字を習うところです。藤野さんは手がないので点字ができません。

藤野さんはそういう中でハンセン病の患者さんの本を読んだのです。北条民雄さんの『いのちの初夜』です。

ハンセン病は手足の末梢神経が麻痺し、失明することもある病気です。失明したハンセン病の人達が唇や舌から血を流しながら点字を読むということを知りました。西亀さんが藤野さんのことを知った時と同じように藤野さんは魂が震え、そんな人がいるのか。自分も頑張ってみよう、と、点字を唇や舌で読んだのです。

以前私は神谷美恵子さんの『生きがいについて』という本を読んだときに舌読を知りました。神谷さんは精神科医で今の上皇后・美智子さまのカウンセラーをしてお



られました。そして、美智子さまのカウンセリングの傍ら岡山のハンセン病療養所・長島愛生園でハンセン病の人達を診ておられました。

この本の中に近藤宏一さんという患者さんが出てきます。近藤さんはハンセン病のため、目が見えず、指先の感覚が麻痺していたので、点字を読むことができませんでした。しかし、ある日、聖書の言葉と出会います。友人が聖書を朗読してくれるのを聞くうちに、自分の中で制御できない衝動に駆られ、感覚の残る唇と舌先で点字の聖書を一心に読み始めたのです。聖書に光明を見出した近藤さんは目の見えない人を中心に楽団を作りました。ハーモニカバンド「青い鳥楽団」です。名前の由来は、心の中にある幸福（青い鳥）を発見しようです。評判が評判を呼んで海外でも演奏をしたそうです。神谷さ



んは「長島愛生園ながしまあいせいえんの中では、多くの人がハンセン病びょうにな
って隔離かくりされ、人生じんせいに絶望ぜつぼうしています。しかし、そうい
う中なかで、おそらく一番ばん生き甲斐がいにあふれている集団しゅうだんは目
が見えない人達ひとたちです。彼らかれは深い闇やみの中で大悟たいごし、新し
い精神世界せいしんせかいに喜びよろこを見つけ出だしたのです」と言いわれてい
ます。

藤野ふじのさんは血ちのにじむような努力どりょくの結果けつ、唇くちびるで点字てんじを
読むよことができるようになりました。しかし、福岡盲学ふくおかもうがっ
校こうは入学にゅうがくを認めみとませんでした。手てがないということことで鍼しん
灸きゅう・マッサージができないからです。しかし藤野ふじのさんは
あきらめませんでした。調しらべると大阪おおさかの盲学校もうがっこうには音楽おんがく
科かがあり、音楽科おんがくかなら手てがなくても関係かんけいないだろう
と、そこに点字てんじで手紙てがみを出だしました。大阪おおさかの盲学校もうがっこうの方ほう



から「わかりました。試験に行きましょう」と、福岡まで盲学校の先生が試験をするために来てくれました。それまでに藤野さんはいろいろな人の助けを借りて猛勉強をしていましたので、見事合格となり、大阪市立盲学校の中学部二年生になりました。この時、藤野さんは満20歳でした。

それから何度も試験がありました。勉強をしながら藤野さんは、将来、盲学校の先生になりたい〴〵と思い、先生になる決意をしました。それには、大学を出なければなりません。また猛勉強が始まりました。当時、大学は目の不自由な人の入学を認めていませんでしたから、藤野さんは大変な苦勞をしながら日本大学の通信教育部を六年かけて卒業されました。

その後、就職をするのに点字での教員採用試験が当時



はなかったので、「どうにかして点字での教員採用試験をしてほしい」と訴えました。その結果、「藤野問題対策協議会」というものができ、点字の教員採用試験が施行されました。藤野さんはその試験に合格し、念願かなって教員に採用されました。そして、ついに母校の大阪市立盲学校の教諭になったのです。

西亀さんは藤野さんに会って苦難の体験を聞き、勇気と希望をもらいました。この時以来、西亀さんと藤野さんはずっと交流を続けておられるそうです。

藤野さんは西亀さんに常々「障がいと壁と思うか、扉と思うか。それはあなた次第ですよ」「決して、決してあきらめないでください。あなたの夢を」と言われているそうです。



今回は、盲目という過酷な運命を乗り越えられた方々のお話を書かせていただきました。どんな苦難でも、それを乗り越えるためには、不屈の精神が求められます。今回のお話で皆さんお分かりかと思いますが、先達の希有な、貴重な体験を学び、自分にもできる」と信じ切り、努力を続けることが何より肝要だと思えます。人間には誰しも無限の可能性があります。「舜も人なり、我もまた人なり」(※)です。

※舜も人なり、我もまた人なり

人は誰でも努力や心掛け次第で立派な人間になれるということ。

「舜」は中国太古の伝説上の聖天子で五帝の一人。舜も自分も同じ人間だから、舜にできたことは自分もできるという意。

